

奈良坂源一郎関係史料目録（四・完）

—収集家・博物家としての奈良坂—

Catalogue of NARASAKA Gen'ichiro's Collection, with explanatory notes.
Part 4: Narasaka as a Collector and Naturalist

島岡 眞 (SHIMAOKA Makoto)

〒 467-0873 名古屋市瑞穂区竹田町 2-6-N603

Abstract

This paper, as the fourth and the last catalogue of the archival documents of Gen'ichiro NARASAKA, presents a brief summary of documents recently donated to Nagoya University Museum as well as unreported ones from the previous collections. Picture postcards comprise more than 1,300 pieces of tourism postcards, which are presented here by prefectures. The collection of more than 1,500 postcards includes some of the first postcards issued by Japan Post, which the author examines with regard to their contemporary commerce in Nagoya. At last, the author looks at Narasaka's museum activities in the context of the Owari School of Natural History.

はじめに

平成 22 年春近く、奈良坂宏家より縁者宅から新たに源一郎の遺品が多数出てきたとの連絡があり、前西川館長と筆者で実物を拝見することになった。

それらの遺品は、絵葉書や葉書類、書画や切抜等、これまでに整理を終了したものの片割れとなるものや、新たな種類の遺品など大量の品々であった。戦時中疎開していた源一郎の遺品は戦後も何箇所もの関係者宅に保存され、先回の遺品取り纏めでは見逃されていた縁者宅のものが今回発見されたのである。

これらの寄贈受け入れを済ませ、整理に取り掛かったのが夏となり、最近終了したところである。本来この史料目録（四）は昨年度で完結する予定であったが、以上の理由により 1 年の間をおくことになってしまった。また、突然の新たな資料の出現により、資料分類の体系も変更せざるを得なくなってしまい、多少見苦しい目録となったことをお断りする次第である。

これまで提示できなかった〈02・慶弔辞類〉、〈07・拾遺集〉の目録とともに、今回最も数量が多かった、観光絵葉書と葉書、特に明治初期のものに焦点を絞り、最後に博物学者としての資料の幾つかを紹介したいと思う。

1. 絵葉書

先の史料目録（二）の絵葉書類においては、記念絵葉書や震災絵葉書などとともに観光絵葉書も 300 点ほどあったが、今回の絵葉書 1,000 点弱はほとんどが全国各地の観光絵葉書である。これらを一括してまとめてみると以下のようなものである。

北海道；1 種，9 点はアイヌ風俗，岩手；3 種，26 点，宮城；25 種，165 点，福島；1 種，8 点，東京；

7種, 35点, 神奈川; 8種, 67点, 群馬; 2種, 9点, 栃木; 7種, 51点, 茨城; 11種, 57点, 千葉;
3種, 29点, 富山; 1種, 2点, 石川; 4種, 23点, 福井; 4種, 40点, 新潟; 1種, 6点, 長野;
14種, 84点, 山梨; 1種, 1点, 静岡; 10種, 46点, 愛知; 3種, 21点, 京都; 14種, 96点, 大阪;
3種, 23点, 滋賀; 8種, 58点, 兵庫; 4種, 20点, 奈良; 12種, 119点, 三重; 4種, 21点, 岡山;
1種, 1点, 広島; 2種, 3点, 島根; 4種, 28点, 鳥取; 1種, 11点, 徳島; 2種, 9点, 香川;
8種, 41点, 愛媛; 1種, 11点, 大分; 2種, 38点, 沖縄; 1種, 2点風俗, 朝鮮; 2種, 3点風俗他,
満州; 9種, 58点, 南洋; 1種, 14点

これを見ると、東北地方では青森、秋田、山形、近畿では和歌山、四国では高知、九州は大分以外の諸県のものが残されていないが全国各地に跨っていることが分かる。これらが全て、奈良坂自身の旅行による収集とはいえず、知人友人から受贈のものも多いであろうことは、後にも触れるが、彼ら宛ての葉書を奈良坂が多数残している<09葉書2>ことから想像される。

しかし、大半のものは奈良坂の旅行に伴う収集品と言えそうである。というのも、<07・拾遺集>のなかに旅館荷札が残されており、その中に花巻の「千秋閣」、宇都宮の「白木屋ホテル」、伊予の「鮎屋旅館」、耶馬溪の「長命館」などを見ることができる。残念なことにこれらの荷札にも、絵葉書にも年月日が記録されていないため旅行との繋がり確認できないが、先の史料目録(二)で書いたように、幾つかの紀行文を残している旅行好きな奈良坂の一面を現しているものと思われる。

これら多数の観光絵葉書中、最も多いのは出身地宮城県のもので、観光地京都や奈良を凌いでいる。今回の東日本大地震で、彼の郷里・矢本(現東松島市)も甚大な被害を受けたが(当時の航空自衛隊松島基地の被災の映像で生々しい)、鎮魂の意を込めて、隣町・石巻の穏やかな風景を掲載させて頂こうと思う(図1・石巻, 史料番号05-1026)。



(製所眞寫館茶禰)

▲望ヲ町全リヨ川上北町巻石

(前陸)

図1. 石巻

これまで絵葉書は< 05・絵葉書類 >の中で郵便収集物の一つとして整理し、660点余を数えていた。今回の観光絵葉書を主とした1,000点弱はやむなく前回は追う形で、< 05 >の中で1001番からの付番とした。

2. 明治初期の葉書

今回の追加史料の中で、最も点数の多いものが収集物としての明治期の葉書である。1500点余に及ぶが、ここでその内の明治初期の葉書を概観してみたいと思う。

我が国の近代郵便制度は明治4年の東京・大阪間の官業による書状送配達から始まり、< はがき > は明治6年12月を嚆矢として(図2・葉書, 史料番号09-662), 同8年から本格的なものとなったと言われる(郵政省, 1971)。この史料の中には明治6-7年製の葉書を使用した物が180点余, 8年製の物が550点含まれている。しかもこれらのお大半は、名古屋とその近辺商人の商取引の通信である。ここでそれを点数の多い商人別にみると以下のようなものである。

有松村の井桁屋孫兵衛, 木綿屋清兵衛, 半田の松坂屋光助, 柳原孝助, 知多の中嶋七右衛門, 名古屋では和泉屋徳二郎, 伊藤次郎左衛門, 金物屋徳兵衛, 吉島屋市兵衛, 金明屋庄太郎, 小泉徳兵衛, 笹屋久兵衛, 佐藤仲次郎, 立田屋吉兵衛, 長瀬勘兵衛, 長谷川料七, 浜嶋与一, 藤屋孫郎九, 森本善七, 吉川屋七右衛門などである。これらの中には、幕末の尾張において御勝手用達格や御奉行所御用達格などとして困窮の藩財政を支えた者や、維新後に名古屋藩通商会社総頭取, 商船会社総括として名古屋経済界を牽引した者たちの名も見出せる(名古屋市役所, 1915)。ちなみにこの中で最も点数の多

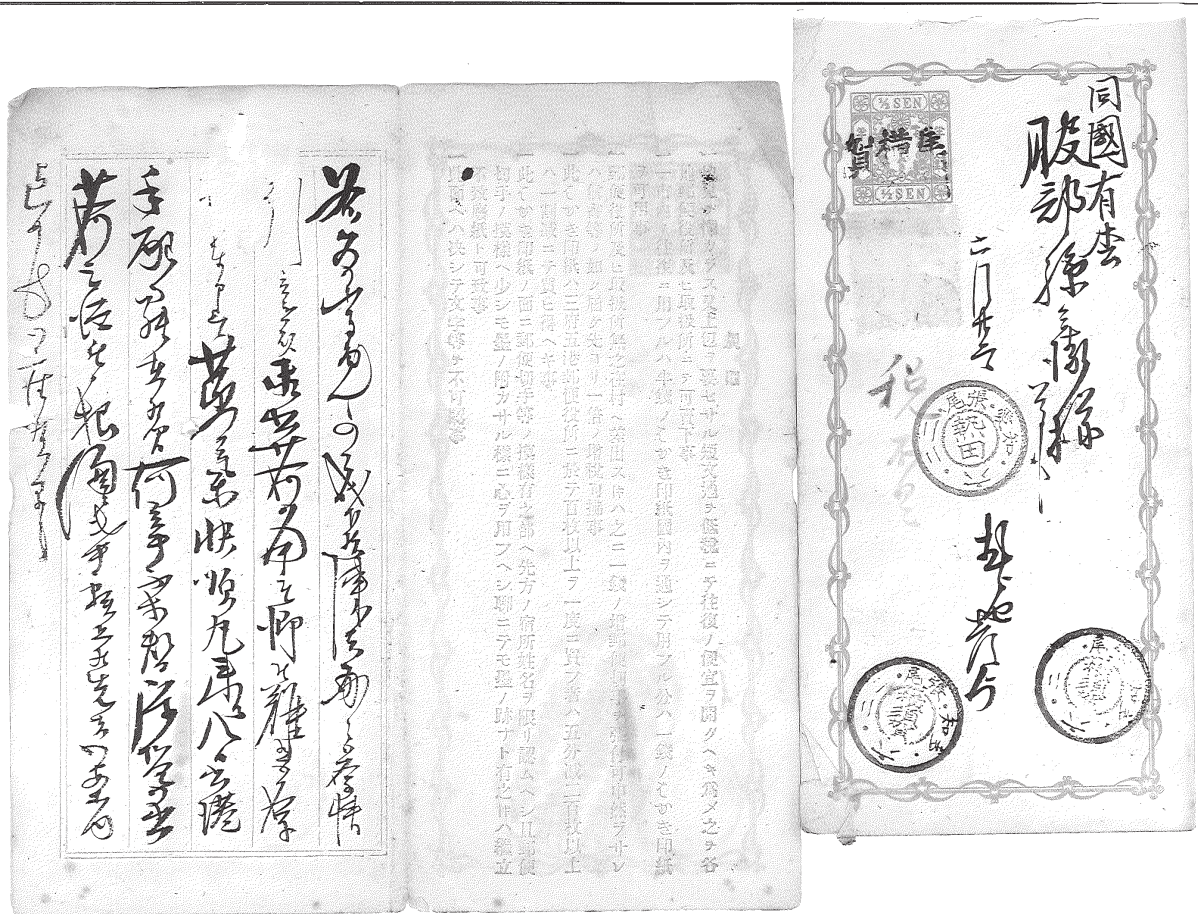


図2. 葉書

い木綿屋（服部）清兵衛の場合を見ると、全 116 点の内東京の長谷川から 20 点弱、他に大阪、西京、名古屋、足利、四日市などの各商業地からの来信である。

この葉書リストの前半は明治 20 年代以降の奈良坂宛てや医学校及び校友会、同僚宛てのものが 300 余点含まれる。奈良坂は医学校で長い間教務関係の担当をしており、その関係で学校・病院宛ての物を事後に集め、また彼の郵便関連資料の収集趣味が同僚の協力の下で、寄贈されたものと思われる。

今回の葉書はその点数が大量に及ぶこともあり、先に整理した< 04・書簡（葉書）>と別建てとして< 09・葉書 2 >とした。従って、奈良坂や医学校関係の書簡等を調査する場合は双方を調べるようお願いしたい。

なお、収集家・奈良坂の他の一面として、日常の細々とした品物が< 07・拾遺集>の中で見ることができる。様々な商品ラベルや松坂屋を始めとした多種類の商店の封緘ラベル、名古屋通俗図書館の特別会員証、振甫プール入場券等々。又、絵画を始めとした数種類の新聞、雑誌の切抜帳もその一端を示しているのであろう。

3. 愛知の博物家として

奈良坂の大きな業績の一つが、近代的博物館活動の創始と展開である。それにも関わらず、これに関する資料は余り残されていない。それは解剖学関係の遺品がほとんど無いことと同様である。そのわずかの資料の内、『虫魚図譜』は平成 17 年に復刻刊行され（名古屋大学博物館，2005）、< 愛知教育博物館 >の創設については、「借地證書」「愛知教育博物館実況一覧」を下にした、とりあえずの報告が平成 17 年に西川輝昭氏によってされている（西川，2005）。この< 愛知教育博物館 >については今後の資料発掘をはじめとして、一層の研究の進展が待たれている。

ここではこのコレクション中の幾つかから、その足跡の一端を報告することで本「奈良坂関係史料目録」の結びに代えたいと思う。

史料< 02・慶弔辞類 >には< 02 - 30 >で愛知県知事三邊長治が「・・・四十年間ノ永キニ亘リ鋭意学究ト教養トノ使命ヲ全ウセシノミナラズ教育博物館ヲ創設シテ生理博物ノ知識普及ニ寄与シタル所亦甚シトセズ・・・」との謝辞、< 02 - 27 >には校友会長の田村春吉が「・・・先生又夙ニ自然科学知識ノ涵養ノ急務ナルヲ察知セラレ、動植物標本模型の蒐集ト、教育博物館ノ創設ニカヲ尽サレ、国民常識ノ向上ニ貢献セラレタルコト甚大ナリキ、然モ其経営意ニ如クナラズ、同士者悉ク其責任ヲ回避スルヤ、先生其責ヲ一身ニ負ヒ、巨額ノ私費ヲ投ジテ惜マズ・・・」と閉鎖に至る苦勞のいきさつを言及している。

史料< 06・写真類 >には< 06 - 32 >に伊藤圭介翁九十賀寿の写真で、尾張嘗百社の人たちとともに新しく教育博物館を立ち上げた奈良坂や同士・坂崎親成らとの集合写真がある。奈良坂は明治 21 年、東京の伊藤圭介を訪ね（圭介日記・明治 21 年 8 月 29 日、未公開）、博物館設立の話等をしたと思われるが、その後の博物館設立支援者の名簿にはなぜか圭介や尾張嘗百社友の名前は見当たらない（加藤，2008）。

史料< 07・拾遺集 >の中には本コレクション整理に当たって、複製物として蒐集・整理したものを含めている。その中の< 217 - 219 >は大阪・杏雨書屋所蔵の奈良坂源一郎による写本『雀巢園虫譜』である。これを見ると奈良坂が如何に尾張本草学の継承者であり、新しい博物図を志向していたかが分かる（島岡，2009）。また、< 221-222 >では「博物館出品目録」として当時の教育博物館の活発な活動実態の一端を伺うことができる。

おわりに

昭和 62 年、源一郎の又甥に当たる船橋在住の奈良坂源次郎氏から、医学部図書館に源一郎の足跡についての問合せが寄せられたのが最初の出会いである。その後、源次郎氏は 2 度に亘り〈奈良坂源一郎伝〉として祖父の足跡を纏められた（奈良坂，1995，2004）。平成 17 年には名古屋の孫に当たる奈良坂宏氏宅より、数度の空襲から守りぬかれた大量の源一郎遺品が博物館に寄贈されることとなった。

医学部以来の関係で、この源一郎史料の整理に研究協力者として携わることになった。医学やその他の素養に乏しい筆者であるが、多くの方々のご指導・ご協力を頂くことにより纏めることができ、感謝するばかりである。なかには、資料判読のできなかつたものや誤読のまま活字化したものも多々あるかと思われるがご勘如頂きたいと思っている。

なお、本史料は博物館の所蔵データベースとして、ホームページから閲覧が可能となっている。以前の報告で不明であったものや誤読していたものも、その後判読・訂正できたものはこのデータベースで最新情報を提供するよう努めた。併せてご利用頂きたいと思っている。

追記

本原稿提出後、〈奈良坂虫魚図譜展〉が 12 月から当館で開催されているが、その前日に奈良坂源次郎氏が逝去された。郷里矢本の被災を悼みつつの永眠である。氏の功績への感謝と共に、ご冥福を附記させていただきます。

引用文献

- 加藤詔士（2008），愛知教育博物館の開設（名古屋大学大学院教育発達科学研究紀要（教育科学）54（2）p 11
島岡眞（2009），「蜂譜」に見る尾張本草学—その継承と展開—（伊藤圭介日記 第 15 集所収）
名古屋市役所編（1915），名古屋市史 政治篇
名古屋大学博物館刊（2005），奈良坂源一郎虫魚図譜
奈良坂源次郎（1995），解剖学者 奈良坂源一郎，自費出版
奈良坂源次郎（2004），完本解剖学者 奈良坂源一郎伝，自費出版
西川輝昭（2005），愛知教育博物館関係史料の紹介と解説（その 1）（名古屋大学博物館報告）21
郵政省編（1971），郵政百年史，p105

（2011 年 10 月 14 日受付）

今回はリストの分量が多大となったため、掲載を割愛し、博物館ホームページ上の「奈良坂源一郎関係史料目録」を参照して頂くことにした。〈02・慶弔辞類〉〈05・絵葉書類〉〈07・拾遺集〉〈09・葉書 2〉の諸項目である。